宮代町郷土資料館　企画展

子育ての祈りと願い

開催にあたって

いにしえの歌人、山上憶良は万葉集で「銀（しろかね）も黄金も玉も何せむに優れる宝子にしかめやも」と詠みました。いつの時代も子をいつくしむ気持ちは変わらないものです。現在のように医学が発達していなかった時代「七歳までは神の子」といわれ、子供は神仏の加護なくして育たないと言われていました。それは七歳になるまでの間、さまざまに行われた儀礼などからも知ることができます。

今回の企画展では宮代町の子育ての風習にみられる信仰や祈りの形を紹介します。また、今年は明治３２年(１８９９)に産婆規則が制定され、現在の助産婦の資格制度がスタートして、１００年目にあたります。宮代町でも家庭分娩が広く行われていた昭和４０年代までお産婆さんが出産の担い手でした。その分娩道具などの貴重な資料もあわせて展示します。

この展示をとおして、失われゆく宮代の地域文化の一端を知っていただければ幸いです。

宮代町郷土資料館

子を授かる

現代は子供を生むためにいろいろな手段を用いる時代ですが、ひとむかし前、「子供は天からの授かり物」とされ、妊娠や出産は人知の及ばないことと考えられていました。そして、子供の誕生は夫婦の喜びであると同時に家の存続やムラの活動の担い手の確保につながることでもありました。妊娠がわかると次なる願いは無事に安産で生まれてほしいということで、そのために安産祈願や帯祝いといったさまざまな儀礼が行われました。家庭分娩が広く行われていたころの町内の子育て習俗から、妊娠中のものを見てみましょう。

宮代の子育て習俗（妊娠）

妊娠

妊娠したことを「ミモチになる」、「はらむ」などといいます。食べ物の好みが変わったり、ヨコッパラが痛くなったりして妊娠したことがわかると姑や夫に最初に告げました。

中には、恥ずかしくてなかなか言い出せずにいることもあったそうです。妊娠５ヶ月めにはじめて腹帯をしめる帯祝をするためにお産婆さんに世話になるとき初めて話したという人もあります。

妊娠祈願・安産祈願

子供を授かるため、そして安産のために町内では姫宮神社や東粂原郷地蔵、須賀島の子育て地蔵などに、町外では白岡町上野田の正伝寺開山様、春日部市一ノ割の円福寺、東京都中央区日本橋の水天宮などに参りました。東粂原郷地蔵では小さなろうそくをいただいてきました。お産のとき、このろうそくには火を灯すと燃え尽きるまでに生まれるといわれ、現在も７月２４日の灯籠祭りでいただけます。水天宮では腹帯をいただきました。

腹帯

妊娠５ヶ月目の戌（いぬ）の日に妊婦は実家から贈られた腹帯をお産婆さんに巻いてもらいました。犬は多産で安産であることにちなんだもので、腹帯の長さは縁起のいい「七五三（７尺５寸３分）」にしましたがお腹が大きくなるとこれでは短いため、半反にしたものも用意しました。

鯉の贈答

臨月になると実家から鯉が２匹贈られます。これは鯉のように元気に生まれ出るようにとの願いを込めたもので、一匹は妊婦が、もう一匹は家族のものが食べました。

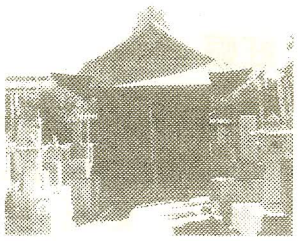
妊婦の暮らし

妊娠していても重いものは持たないように気をつける程度で出産の直前まで日常の生活や仕事をしました。田んぼで産気づき安産で生んだ話も多く聞かれます。

妊娠中にしてはいけないことは葬式にでることで、どうしても出るときは鏡をふところに入れて行きました。また、火事を見て小便をするとあざのある子ができるなどといわれています。食べてはいけないものに柿（身体が冷える）などがありました。

それでは具体的に展示にあわせて安産祈願から見てみましょう。

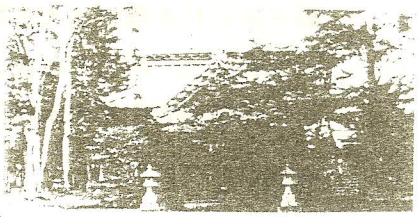
開山様



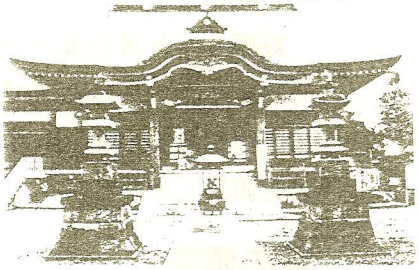
白岡町上野田正伝寺にある開山様は婦人病や安産祈願の寺として信仰を集めています。正伝寺は一説には戦国時代の岩槻城主北条氏房が開いたといわれています。開山様は婦人病を良く治したという四代住職大長益善（だいちょうえきぜん）和尚のことで亡くなるときに石碑をたて「これを信仰すれば治る」と言い残しました。宮代町でも妊娠すると安産祈願に参ったという伝承があります。奉納された絵馬に見られる地名は須賀、国納、百間、川端など町域全体にわたり、信仰の篤さを物語っています。

社寺札にみられる安産祈願

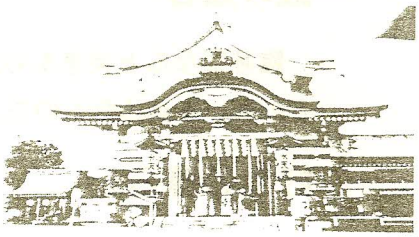
町内２軒の農家の母屋の梁（はり）に火伏せのためにくくりつけられた俵の中に納められていた数千枚におよぶ社寺札の中にも安産祈願のためのものがありました。ここでは姫宮神社、円福寺、水天宮のものを紹介します。



姫宮神社　旧百間村の鎮守です。祭神は多記理姫命、多記津姫命・市杵島姫命の三柱をまつっています。札には「安産守　子養社」と書かれています。



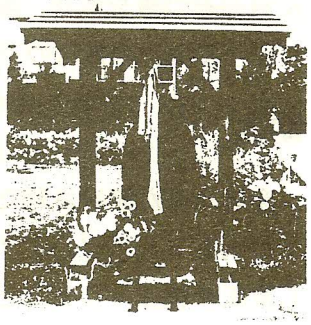
円福寺　春日部市一の割にある円福寺は「子育て呑龍様」で有名な群馬県太田市大光院の呑龍上人誕生の由緒寺として、子育て安産の信仰を集め、宮代からの参拝者も多い寺です。



水天宮　東京都中央区日本橋の水天宮は天御中主命・安徳天皇・建礼門院・二位尼をまつります。安産の神として信仰されています。毎月戌の日に行われる大祭ではたくさんの妊婦や実家の親が腹帯を買い求める姿を見ることができます。

町内の子育て地蔵

地蔵はこの世とあの世で子供を守る仏様ですが、町内では須賀島と東粂原で子育て地蔵がまつられ、安産祈願の信仰があります。



須賀島　須賀島八左ヱ門島の子育て地蔵は享保１２年１月銘があり、２７０年前に建立されたものです。以前は人々は安産祈願し、無事に子供を授かると農産物や絵馬を供えたものでした。

東粂原　一説に行基菩薩の作と伝えられる地蔵ですが、製作年代は詳らかではありません。現在７月２４日に青年会主催で行われる灯籠まつりにおいて、灯されたろうそくをいただき、これをお産のときに灯すと燃え尽きるまでに子供が生まれるといわれています。できるだけ短いろうそくがよいので、青年会の当番の人はカッターで削ぐように切ります。

子を生む

そして、いよいよ出産の日がやってきます。出産は「障子のさんが見えなくなったら生まれる」「時計の針が見えなくなったら生まれる」「片足を棺桶に突っ込んでいる」などといわれ、まさに命がけでした。また出産は大量の出血をともなうことからケガレとされ、産のケガレ（血ブク）は死のケガレより（死ブク）より強いといわれました。特に産後２１日目のトコアゲまでは「日に当たってはいけない」などさまざまな制約がありました。

宮代の子育て習俗（出産）

出産

町内では昭和４０年代まで家庭分娩が広く行われていました。出産は嫁ぎ先で行われることが多く、部屋は若夫婦の寝室である奥の部屋が多かったようです。

いよいよ出産が近づくと産婦は産後２１日間、髪を洗ってはいけないので髪を洗い、そして麻ひもで髪を縛ります。麻は丈夫なので「丈夫な子を授かる」という願いが込められています。この麻ひもはお七夜の雪隠（せっちん）参りでオサゴを入れた半紙を縛ることに用いたりします。陣痛がだんだん強くなると腹帯を解き、寝巻きに着替えます。布団を汚さないように、あらかじめ作っておいた灰布団（かまどの灰を入れた布団）を敷き、さらに油紙を敷き、そこでお産をしました。生み方は座って生む「座産（ざさん）」が一般的でしたが、お産婆さんの指導で「寝産（ねざん）」が広まりました。でも「座産でないと生んだ

気がしない」と拒む人もありました。子供が生まれるとすぐ、実家から米と鰹節と味噌が届き、この米を炊きます。これをウブタテゴハンといい、釜のふたをさかさまにしてご飯を高盛りにして荒神様に供え、産婦とお産婆さんが食べました。子供が生まれるとお産婆さんがへその緒を切り、産湯につかわせます。後産(のちざん)」は夫が受け取ると、半紙などに包んで大戸の敷居の下に埋めました。

助産

産婆規則が制定された明治末期まで近所に住む手先の器用な人が子供を取り上げました。この人をトリアゲバアサンあるいはコトリといいます。お産婆さんはひと月に一回、往診し血圧や腹囲・心音などを調べ、お産になると助産をしました。そして、お七夜まで毎日お湯をつかわせに来てくれました。宮代町では根岸さん、神田さん、石井さん、岡安さんなどのお産婆さんが活躍しました。また、大正初期に亡くなった男性のトリアゲバアサンがいたという伝承があります。また、明治時代、日清戦争の援護活動の一環として、兵員の家族出産は遠近にかかわらず無料で出産を取り扱った須賀村のお産婆さんがいた（『埼玉県史料叢書』）ということです。

産後の処理

胎盤のことを後産（のちざん）、またはエナといい、これは油紙や半紙に包んで大戸（玄関）の敷居の下に埋めました。人に多く踏まれたほうが丈夫に育つといいます。

へその緒は生後数日で落ち、桐の箱に入れて取っておいたり、お七夜の雪隠参りで便所神に供えたりしました。子供が大病したとき、これを煎じて飲ませるとよいともいわれています。

産湯や洗濯に使った水は先達や神主に見てもらった方角（アキノカタ）に穴を掘り、そこに捨てました。

産後の禁忌

産後２１日目のトコアゲまで産婦は様々な制約を受けました。髪を洗ってはいけない、風呂に入ってはいけない、日に当たってはいけない、神様に関することをしてはいけない、針仕事をしてはいけないなどです。しかし、それは一方で産婦をゆっくり休養させる意味もありました。

ここでの展示では産婆さんの道具を展示します。

産婆さんの仕事

現在もご健在のお産婆さん、根岸ますさんにお産婆さんの仕事についてたずねました。

明治４４年生まれで昭和５年に産婆実地試験に合格しお産婆さんになられました。当時は電話も普及していないころでした。夜中に「お産ですからついて来てください。」と家の人が自転車で迎えに来て、その後を自転車で走っていて、前方の人が道を曲がったのに気がつかずにいってしまい川に落ちそうになったり、お産が重なった時のために自宅に黒板を置き、今どこにいるかを書いておいたり、さまざまなご苦労があったそうです。お産婆さんの仕事はお産だけではありません。まず妊娠５ヶ月を過ぎたころからの検診。これはひと月に一回、血圧や腹囲、心音などを記録します。出産予定日の算出もしました。また、お産の後はお七夜まで毎日子供をお湯につかわせにいきます。そのとき、へその緒の消毒および産婦の消毒をし、消毒綿をつくって置いてきました。

子を育てる

十月十日（とつきとうか）を経てやっと生まれた命。医学が進歩していかなった昔は乳幼児の死亡率は高く、「七歳までは神の子」「七つ前は神のうち」といわれ、神仏がその運命を決めると考えられていました。七つを迎える帯解きの祝いまでにさまざまな儀礼を行い、神仏に感謝し、その後の無事な成長を祈りました。こうした儀礼は特に生後１年間に多く行われ、昔はこの期間の生育が特に困難であったと考えられます。昔の人は、子供の命はふわふわとした存在であり、一つ一つの儀礼を通して少しずつしっかりとかたまったものになるというとらえ方をしていたようです。

宮代の子育て習俗（育児）

お七夜

生後７日目のお祝いです。ヒトシチヤともいい、親戚や近所の人がお祝いに来ます。アカノゴハン（うるち米とアズキ）を炊き、名づけをしたり、雪隠（便所）参りをしました。雪隠参りでは家によっても異なりますがオサゴ（洗米）とへその緒を半紙に包み、マメッカラの箸をつけて便所の窓のさんにさします。また、かまどの墨を額にちょっとつけました。こうすると子供が丈夫に育つと信じられていました。

宮参り

宮代では家によって異なりますが、２１日目か３３日目に宮参りが行われます。子供は実家から贈られた産着を身につけます。産着は一つ身の着物で背縫いがないため、背後から魔物が入るといわれ、背中に背守りをつけました。

食い初め

１００日目の祝いです。子供に初めて尾頭付きの一人前の膳を用意して、米数粒を箸に乗せ、食べさせる真似をします。実際には離乳食も与えていない時期ですが、少しでも早く大きくなってほしいという願いが込められています。

初節供

初めての節供には実家や親戚から女児には桃の節供に雛人形や浮世人形、男児には端午の節供に五月人形や鯉幟等が贈られます。節供当日には贈ってくれた人を招き、共に祝います。

初正月

初めて迎える年の暮れに実家から、男児には弓破魔、女児には羽子板が贈られます。

初山

初めての７月１日（富士山山開きの日）には初山といって近隣の浅間神社にお参りします。宮代町内では山崎の赤松浅間社、辰新田の浅間神社、和戸の浅間神社でこの行事が行われています。お参りを済ませるとうちわ二本とお札とたんきり飴などを買って帰り、親戚や近所の人など、産見舞をくれた人に配りました。

初誕生

初めての誕生日に一升餅をついてお祝いしました。この日までに歩いた子はこの餅を背負わせ、上手に歩いた時はちょっと転ばせたりしました。

帯解き（七五三）

帯のついた子供の服から本断ちの着物になるということで七歳のときにお祝いをしました。現在の七五三と同様に鎮守様へお参りし、親戚を招いてお祝いしました。

展示について見てみましょう

お七夜の雪隠参りの供え物

「妊娠中、便所掃除をよくするときれいな子が生まれる.便所の神様は美人だからだ。」という伝承があります。便所の神様はお産の神様でもあり、その御礼として、また今後の無事な成長を祈って便所に参ります。子供をつれていくのはお産婆さんや姑などです。産婦はトコアゲ前で外には出られないので同行しません。便所ではオサゴやへその緒を半紙で包んでマメッカラ２本の箸を付けて窓のさんにさします。

宮参りの産着

姑が子供を抱いて、その上に掛けるのでカケギモン（掛着物）ともいわれます。背中に縫い取りがあり、背守りといわれます。背縫いのない一つ身の着物には魔物がくるので、子供を守るために縫い付けられたものです。展示の男児の産着は夏の絽の着物で、女児の産着は銘仙です。いずれも昭和１０～２０年代のものです。

初節供

お雛様は実家から、浮世人形は親戚から贈られました。浮世人形は明治から昭和にかけての流行のようです。また、写真の鯉幟は昭和１６年に百間２丁目付近で撮影されたものです。鯉幟の先端に竹かごがついています。

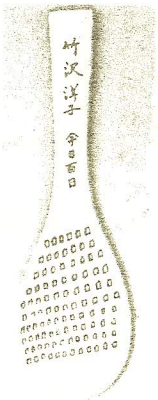
初山のお札・うちわ・たんきり飴

現在町内の赤松浅間社と辰新田の浅間社で初山に配られるお札と、昭和２５年の初山のうちわです。初山のうちわには富士山を背景に子供が元気に遊ぶ姿が多く描かれています。

夜泣き封じ

夜泣き治すために お札をいただいてきました。また、おしめを夜、外に干すと夜泣きになるともいわれました。

百日咳



白岡町白岡にある石神様は百日咳を治す神様とされています。いしがみさまの「いし」が「せき」に転訛し、「せきがみさま」として信仰されるようになったそうです。ここでは百日咳になると供えてあるしゃもじをいただいてきてご飯を盛って食べます。治るとしゃもじに口の字を百個書いて奉納しました。宮代町では百日咳の神様は未確認ですが、調査を進めていきたいと思います。

展示目録

	コーナー名	資料名	所蔵者・寄贈者
1	子を授かる	開山様絵馬	白岡町教育委員会
2		姫宮神社御札	新井隆夫氏
3		円福寺御札	新井隆夫氏
4		円福寺御札	青木千代子氏
5		円福寺御札	青木千代子氏
6		水天宮御札	新井隆夫氏
7		ろうそく	東粂原郷地蔵
8		絵馬	白岡町柴山諏訪八幡神社
9	子を生む	往診用具一式	根岸ます氏
１０		助産用具一式	根岸ます氏
１１		助産用具一式	神田勝氏
１２		産婆関係書類	根岸ます氏
１３		産婆関係書類	神田勝氏
１４		産婆価格表	神田勝氏
１５		妊産婦手帳	青木千代子氏
１５	子を育てる	初山うちわ	島村宗作氏
１６		初山御札	山崎赤松浅間社
１７		初山御札	辰新田浅間社
１８		初山御札	杉戸町河原浅間社
１９		たんきり飴	杉戸町河原浅間社
２０		お雛様	加藤勝司氏
２１		こいのぼり（写真）	知久勇氏（PN.岩井春治氏撮影）
２２		夜泣除守護	新井隆夫氏
２１		百日咳しゃもじ	白岡町石神様
２２		七五三御札	和戸浅間神社
２３		男児産着	矢部多一氏
２４		女児産着	矢部多一氏
２５		男児産着	青木千代子氏
２６		女児産着	青木千代子氏